

## [特別活動]

# 体育的イベントを学級経営に関連させることは 学級集団にどのような好影響を及ぼすかについての研究

—仲間と目標を共有して、良好な学級集団を育成するための方策—

飛田 修\*

## 1 主題設定の理由

昨今のいじめや不登校の問題、離職率増加の問題、若者のひきこもりやフリーター増加の問題などの要因の一つには、いまの子どもたちや若者の人間関係形成能力の低下にあると考えられている。「公的な集団の中で、人間関係を調整しながら生きていく」—こうした人間関係形成能力は、学校生活に限られたことではなく、社会に出てからも必要になる大切な能力である。将来にわたってわが子の人間関係形成能力について心配される保護者が多いのもなすける。つまり、現在の学校生活でも、将来の生活においても、集団とのつきあいをなくして生活は成り立たないということである。

学習指導要領(2008)の特別活動の目標には、「集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」と示されている。つまり、「よりよい生活を築く態度の育成」と「よりよい人間関係を築く態度の育成」を一体にして指導する必要があるということである。また、杉田(2009)は、「学校生活の中で人間関係形成能力がうまく発揮できるようになった子どもたちは、社会に出て地域や職場などで不適用を起こすことは少ない。だからこそ、学校生活の中で多様な集団活動をたくさん経験させ、人間関係が身につくような活動を積み重ねていく必要がある」と述べている。

しかし、「人間は一人でも生きていくことができる」という感覚の子どもが多いことも事実である。その考えの裏には「集団は面倒。個人は楽」という考えや集団のもつ力を知らないことが挙げられるのではないだろうか。

「名選手は必ずしも名監督ならず」という言葉がある。球技大会を例にとって考えてみる。体育を専門とし、高い技術や知識をもっている教師が必ずしも子どもたちのチーム力を高めるとは決して言えない。例えば学年のサッカー大会で、教師のもつ高い技術力をもって、個々の子どものドリブルやシュートなどの力を徹底的に鍛えたとしても。しかし、それほど子どもたちの実力差がない小学校段階では、このような教師の学級ではなく、ほとんど技術的なことは知らないけれど、学級の輪を大切にしている教師が担任する学級が優勝してしまうといったことがよくある。そこには、一般的に「集団力を高めて個を育てよう」とする発想の有無が大きく影響していると思われる。ここで重要なのは、集団力が高く、互いに認め合い切磋琢磨する学級集団では、個々のモチベーションも高く、全体の生産性が上がるだけでなく、一人一人の力も効果的に伸ばすことができるということである。

上記のことから、「自分一人ですることは限られている」「みんなでやれば大きなことができる」と実感させることができるような望ましい集団活動にできれば、集団(人間関係)の必要性も実感できるようになるのではないかと考え、本主題を設定した。

## 2 研究の目的

子どもたちが目標を共有して、仲間と協力することを意識させるような体育的イベントを年間を通して位置づけていく。それにより、仲間と豊かにかかわりながら達成できるような体育的イベントを学級経営に関連させることは、より肯定的な学級集団を育む重要な手立てとなるかどうかについて検証する。

## 3 研究の内容と方法

### (1) スポーツテストで一年間の学級の基盤作り

スポーツテストは「やらされる」ものだと感じている子どもは多い、特に運動を苦手としている子どもにとっては

---

\* 三条市立栄中央小学校

とても苦痛になっているようだ。また、運動が得意な子どもたちにとっても同様に感じている子どもも少なくない。

そこで、一人一人のがんばりが認められるようなスポーツテストの実施方法を工夫することで、テストに対する意欲が向上し、個々の記録アップに繋がるのではないかと考えた。子どもたちにとって一番励みになるものは、やはり友達からの励ましや声かけである。励ましの言葉がテストの最中にたくさん飛び交えば、自然と意識も高まり、意欲的に運動に取り組むことができる。年度当初に学級全体で一つの目標を達成できれば、その後の学級集団作りにも非常に有効になるのではないかと考えた。

### (2) 個の目標を全体の目標につなげる、マラソンチャレンジタイムの設定

当校の体育的行事の中の一つに、校内マラソン大会がある。コース設定の仕方も工夫が凝らしてあり、3年生以上は走る距離を選択できるシステムになっている。一番長い距離を走るスーパーロングランコースは2000mとなっている。持久走は苦手な子どもは本当に苦手である。苦手というよりは、長い距離を走りたくないという気持ちの方が強いかもしれない。6年生を担任したということで、全員に一番長い距離を走らせたいという思いを、マラソンチャレンジタイム開始前から強くもっていた。

そこで、マラソンチャレンジタイムの設定の仕方を工夫することで、長く走ることにに対する意欲を高めるだけでなく、仲間と積極的にかかわろうとする意識も芽生え、全員でスーパーロングランコースに挑戦し、完走したいという目標ができるのではないかと考えた。

### (3) 長なわパフォーマンスを通して学級の素晴らしさを再確認

長なわとびは一人では活動できない運動である。仲間の動きを意識してなわを回すことで相手を思いやる心も育っていく。しかし、いつも関係がうまく成立するわけではない。取組の中で、回すスピードや回し方、とび方についてなどで文句を言い合うなどの葛藤が生まれる。

こうした葛藤場面は、頭で考えた「思いやり、協力」では解決できない。相手の意見を我慢したり聞いたり、泣いている友達を助けたりなど、仲間と折り合いをつけ、協力が必要なことが必要となる。だからこそ、とぶ回数が増え、記録が伸びたときに歓声が上がリ、集団的達成感を味わえる。

卒業間近になった1月に「長なわパフォーマンスをしよう」という目標を掲げることで、一年間の学級での仲間とのかわりがどこまで深まったのかを、長なわとびという体育教材をつかって見極めることにした。

## 4 実践の概要

### (1) スポーツテストで一年間の学級の基盤作り

#### ① スポーツテストで、昨年の県平均、昨年の6年生の平均を超えよう

表1 H22年度の スポーツテストの平均

#### 【H22男子】

|         | 握力    | 上体起こし | 長座体前屈 | 反復横跳び | 20mシャトルラン | 50m走 | 立ち幅跳び  | ソフトボール投げ | 得点 | 判定 |
|---------|-------|-------|-------|-------|-----------|------|--------|----------|----|----|
| H22学級平均 | 17.00 | 20.56 | 33.67 | 42.89 | 65.33     | 9.08 | 155.22 | 27.67    |    |    |
| 得点      | ⑦     | ⑧     | ⑥     | ⑧     | ⑧         | ⑦    | ⑥      | ⑦        | 57 | C  |

#### 【H22女子】

|         | 握力    | 上体起こし | 長座体前屈 | 反復横跳び | 20mシャトルラン | 50m走 | 立ち幅跳び  | ソフトボール投げ | 得点 | 判定 |
|---------|-------|-------|-------|-------|-----------|------|--------|----------|----|----|
| H22学級平均 | 16.33 | 16.58 | 39.25 | 38.83 | 45.33     | 9.63 | 146.67 | 16.50    |    |    |
| 得点      | ⑦     | ⑦     | ⑦     | ⑦     | ⑧         | ⑦    | ⑥      | ⑦        | 56 | C  |

上の表は、5年時の子どもたちのスポーツテストの結果である。上記の表から、平均的な記録となっている。前年度の6年生は勉強面はもちろん、運動面でも非常に優れていたと聞く。また、この子どもたちのあこがれの的であったとも聞いている。そこで、そのあこがれの的である6年生のスポーツテストの記録を超えることで、子どもたち自身にも自信が芽生え、さらに学級の士気も高まっていくのではないかと考えた。

まず私は、スポーツテストを実施する前に、子どもたちに、

◇学級の平均が男女ともに、ア：H22年度の県平均、イ：H22年度の6年生の平均を上回ること◇  
という目標を発表した。今思えば、子どもたちにとっては少し高いハードルだったかもしれない。どの子も、「本当に目標を達成できるのだろうか。」という不安を抱えながら2日間に及ぶテストを開始した。

## ② 児童の変容の様子

運動を苦手としているAさんは、目標を聞いたときは「絶対無理。できっこない。やるだけ無駄だ。」と後の作文でも書いている。また、Aさんには学校生活においてよきライバルBさんがいる。Bさんも運動を苦手としている一人である。最初の50m走。Bさんが前年度の記録を大きく上回る。その後もどんどん記録を上回る仲間が増えていく。その結果に後押しされ、Aさんも前年度の記録を上回ることができた。テストが進むにつれて、最初はBさんとの比較しか考えていなかったAさんが、「先生、今回の種目、県平均、去年の6年生超えた。」と私に聞く子どもたちの輪に加わっている。2つとも上回ったということを伝えると、「どうせなら完全制覇をねらおうよ。」とテスト前の後ろ向きな姿からは想像できないくらいスポーツテストに前向きになっていた。同じ学級の仲間のがんばりがAさんのテストに対する意識を変えた瞬間だった。

そして、スポーツテスト最後の種目「20mシャトルラン」。Aさんにとってはもっとも苦手な種目である。(Aさんの前年度の記録は34回)テストが始まって不安な表情は変わらない、しかし、ある瞬間にAさんの表情ががらっと変わった。仲間の応援である。結果、友達の声に励まされ66回まで記録を伸ばすことができた。走り終えた後、たくさんの友達がAさんを取り囲み、「よくがんばったね。すごい。」と声をかけている。友達の励ましの声がAさんに自信を与えた瞬間だった。

表2 Aさんの記録の比較

### 【Aさんの結果】

|      | 握力    | 上体起こし | 長座体前屈 | 反復横跳び | 20mシャトルラン | 50m走  | 立ち幅跳び  | ソフトボール投げ |
|------|-------|-------|-------|-------|-----------|-------|--------|----------|
| 6年生時 | 20.00 | 20.00 | 54.00 | 43.00 | 66.00     | 9.20  | 149.00 | 12.00    |
| 5年生時 | 12.00 | 16.00 | 38.00 | 35.00 | 34.00     | 10.30 | 134.00 | 10.00    |

表3 学級と前年度の6年生、県平均との比較

### 【H23 学級男子平均】

|           | 握力    | 上体起こし | 長座体前屈 | 反復横跳び | 20mシャトルラン | 50m走  | 立ち幅跳び     | ソフトボール投げ  |
|-----------|-------|-------|-------|-------|-----------|-------|-----------|-----------|
| H23 学級平均  | 22.11 | 23    | 41.77 | 51.77 | 86.56     | 8.32  | 170.89    | 30.67     |
| H22 県平均   | clear | clear | clear | clear | clear     | clear | clear     | clear     |
| H22 6年生平均 | clear | clear | clear | clear | clear     | clear | not clear | not clear |

### 【H23 学級女子平均】

|           | 握力    | 上体起こし | 長座体前屈 | 反復横跳び | 20mシャトルラン | 50m走  | 立ち幅跳び  | ソフトボール投げ |
|-----------|-------|-------|-------|-------|-----------|-------|--------|----------|
| H23 学級平均  | 21.54 | 18.25 | 49.31 | 43.38 | 58.85     | 9.13  | 164.69 | 20.5     |
| H22 県平均   | clear | clear | clear | clear | clear     | clear | clear  | clear    |
| H22 6年生平均 | clear | clear | clear | clear | clear     | clear | clear  | clear    |

※ clear…平均値を上回った。 not clear…平均値を下回った。

## ③ 考察

目標が一つ一つ達成されていくと、子どもたちにとって自信となり、さらに一生懸命に取り組もうとする意識を芽生えさせる。私自身、スポーツテストにおいてはどうしても個々の記録に目がいきがちだった。しかし、学級全体のめあてをもたせ、取り組ませることの方が非常に意味があるということを実践から学ぶことができた。Aさんのスポーツテストの結果はもちろん、学級の子もたちがお互いのがんばりを認め合い、励まし合えたからこそ、上記のような結果を残すことができたのだと考える。

## (2) 個の目標を全体の目標につなげる、マラソンチャレンジタイムの設定

### ① マラソンチャレンジタイムで、交友関係を広げよう

マラソン大会に取り組む際に、カードを使い、少しでもたくさんの距離を走らせる方法がある。もちろん、私自身も

その方法をよく使ってきた。しかし、走るが好きで、得意な子どもにとっては非常に有効であるが、走ることに苦手意識をもってる子どもにとっては、必ずしも有効ではないと私は考える。

そこで私は次のような方法を取り入れてみた。

ア：個人でがんばる。 イ：グループでがんばる。 ウ：学級でがんばる。

## ② 児童の変容の様子

当時担任をした6年生は、男子14名、女子10名の計24名の学級だった。生活班は一つの班4人で、計6つである。まず、10分間のマラソンチャレンジタイムで走った自分の周回数を連絡帳に記入をさせる。そして、次にグループのメンバーの周回数の合計を、教室後ろの連絡黒板に記入する。最後に担任が6つのグループの合計周回数を画用紙に記入し、全員の前で発表をする。それを毎日続けていくと、少しずつであるが、各グループで声をかけ合って、マラソンチャレンジタイムに取り組むようになってきた。また、周回数も増えていった。(表4参照)

表4 マラソンチャレンジタイム開始10日間の各班の周回数

|    | 9/10 | 9/11 | 9/12 | 9/13 | 9/14 | 9/18 | 9/19 | 9/20 | 9/21 | 9/22 |
|----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 1班 | 19   | 20   | 20   | 21   | 21   | 20   | 23   | 22   | 23   | 24   |
| 2班 | 29   | 31   | 28   | 30   | 31   | 29   | 32   | 32   | 33   | 30   |
| 3班 | 22   | 22   | 24   | 26   | 26   | 28   | 28   | 29   | 30   | 28   |
| 4班 | 33   | 32   | 33   | 32   | 33   | 30   | 31   | 32   | 30   | 31   |
| 5班 | 22   | 25   | 24   | 26   | 25   | 27   | 26   | 28   | 27   | 30   |
| 6班 | 28   | 28   | 29   | 30   | 31   | 32   | 30   | 31   | 31   | 30   |
| 学級 | 153  | 158  | 158  | 165  | 167  | 166  | 170  | 174  | 174  | 173  |

表5 マラソン大会前日までの各班の周回数

|    | 10/9 | 10/10 | 10/11 | 10/12 | 10/15 | 10/16 | 10/17 | 10/18 |
|----|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1班 | 38   | 40    | 52    | 52    | 55    | 54    | 54    | 55    |
| 2班 | 26   | 35    | 38    | 42    | 43    | 44    | 48    | 50    |
| 3班 | 30   | 30    | 39    | 42    | 42    | 45    | 47    | 49    |
| 4班 | 33   | 39    | 38    | 41    | 43    | 44    | 46    | 50    |
| 5班 | 33   | 35    | 35    | 39    | 40    | 43    | 45    | 48    |
| 6班 | 33   | 44    | 46    | 48    | 48    | 50    | 51    | 53    |
| 学級 | 193  | 223   | 248   | 264   | 271   | 280   | 291   | 305   |

上記の表から、周回数は少しずつは増えているが、後半はなかなか増えていない。子どもたちの中にも、これ以上周回数は伸ばせないのではないかと考えるものも出始めていた。

ある朝、グラウンドで、マラソンチャレンジタイムの準備をしていると、クラスの子どもたちがグラウンドに出てきた。「どうしたの?」と聞くと、「マラソンチャレンジタイムだけでは、クラスの周回数が増えないと思って、みんなで話し合い、朝の10分間走ることにしました。」という答えが返ってきた。朝の学級の時間に決めたのだそうだ。子どもたちは私以上に、周回数が伸びないことに疑問を感じ、どうやったらこの状況を乗り切れるのかを学級全体の問題として話し合っていたのだ。その後の周回数は(表5)の通りである。

## ③ 考察

どちらかというともマラソンは苦手な子どもが多かった学級であったが、お互いに声をかけ合い、マラソンチャレンジタイムに取り組んだことで、だんだんと楽しく走れるようになったという感想がほとんどだった。

この活動を境に、特定の友達だけと行動するのではなく、いろいろな友達と分け隔てなく、話したり行動したりするようになってきた。また、主体的に話し合いの場を設定したり、声を掛け合って問題を解決したり、「クラスをよくするために、学級全体で考える」雰囲気が当たり前ようになってきた。

この結果は、共に一つの目標を達成するという共通の願いがあったからだと考える。また、困難に直面したとき、みんなと話し合うことで、素晴らしいアイデアが生まれ、克服できること、そして、みんなで高いハードルも越えることができたことが、学級集団の高まりにつながっていったのだと考える。卒業前、残り半年という時期であった。

### (3) 長なわパフォーマンスを通して学級の素晴らしさを再確認

#### ① 長なわパフォーマンスをしよう

卒業を間近に控えた2月半ば。全校長なわ大会があった。私は常々、「長なわ大会で優勝することは、一番クラスが

まとまっているということの意味するんだよ」と子どもたちに話している。何度もこの目標を掲げ、長なわ大会に臨んだが、後一步のところまで優勝を逃すことが多かった。

そこで、まず基本的な8の字とびが間を空けることなく跳べるように、じっくり練習に取り組んだ。どうしても、続けて何回跳べるかということに意識がいきがちだが、同じ跳び方を何回も練習すると、練習に対する意識が薄れる恐れがあったので、100回連続で跳べたら次の種目というふうに、スモールステップで長なわとびに取り組めるよう、山本(2006)、木下(2007)が提唱する、長なわとび特別カリキュラムを組んで練習を積むことにした。

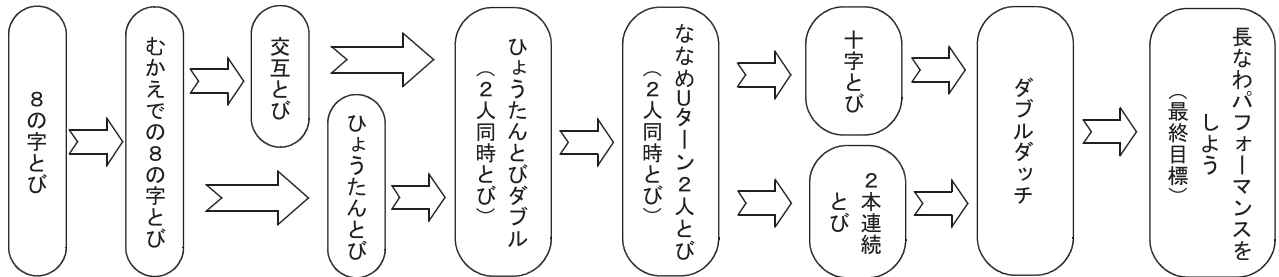


図1 長なわパフォーマンスまでの特別カリキュラム

## ② 児童の変容の様子

子どもたちにカリキュラム表(図1)を見せたとき、どの子もかなりの不安を感じているようで、一人一人のモチベーションが低いまま練習が開始された。

まず「8の字とび」。これはすんなり100回クリア。次にむかえなわでの8の字とび。逆回しに不慣れなせいかなかなか思い通りに回数を伸ばすことができない。こういう状態が1週間程度続いていった。そのとき、こちらが予想しない行動を起こした子どもたちがいた。放課後グラウンドで、練習を始めたのだ。やはり仲間の励ましや協力は不可欠だということである。みるみるうちに子どもたちは上達し、なんとか上記の9種目を成功させることができた。

冬休み明けの1月。長なわ大会に向けての練習を始めなければならない。長なわ大会の種目は「8の字とび」のみである。長なわ大会の出場種目及び人数の報告日。子どもたちから次のような提案が、私にされた。

- 8の字とびだけでなく、いままでの成功することができた種目を組み合わせる大会に出たい。
- 勝ちに行くことも大事だが、全員で出場して勝利を味わいたい。

自分たちが取り組んできたことを、最後までしっかりやり遂げたい、そして、大成功させてみんなで喜びたいという思いから出された提案であった。卒業を間近にして、初めて子どもたち自ら話し合い、決めた目標である。かなり困難なことと思いつつも、真剣な子どもたちの眼差しに圧倒され、快く子どもたちの気持ちを受け入れることにした。

自分たちで決めた目標、みんな同じ志で大会に向かう気持ちをもつことができた子どもたちは強い。その後の練習では、かなりの衝突や葛藤はあったが、本番では一度も失敗することなく、全ての種目を跳ぶことができた。そして、見事、回数、パフォーマンスともに第一位をとることができた。

以下、長なわ大会を終えた後の、子どもたちの感想と新たな学びの記述である。

- ・長なわ大会はとても楽しくできたのでよかったと思う。長なわパフォーマンスは最後少しひっかかってしまったけど、5種類のとび方をひっかからずにできた。20人とびでは、14回とぶことができた。これは先生とクラスがつながっていたからだと思う。
- ・私は長なわ大会が終わって思ったことが二つある。一つ目はクラスの団結力はものすごいということだ。一人ではできないことも、みんなで力を合わせればできるんだなあと思った。
- ・今日の昼休みに長なわ大会があった。放課後や休み時間もつかってたくさん練習した。本番は、最初から最後まで続けることができたし、20人とびでは、新記録の14回をとぶことができた。練習でできなかったことが当日いきなりできるなんて、このクラスはすごいなあと思った。もうすぐ卒業だけど、最後に、すごくいい思い出ができた。みんな、ありがとう。
- ・今日の長なわ大会は、いつもよりみんな真剣にやっていてよかったと思う。特に20人とびでは、みんなの心が一つになったから、最高記録が出せたんだと思う。長なわパフォーマンスも引っかかってしまったけど、たくさん

とべたので、いい思い出になった。長なわを通じて、休み時間にみんなとたくさん遊べてよかった。

・今日は今までの中で、一番よくできたと思う。ものすごく団結したという感じがしたし、楽しかったので…。みんなに心の底から笑顔になれたのは、久しぶりの気がした。ちょっと疲れたけど。そして、仲間がいるっていいことなんだなって思った。

### ③ 考察

休み時間のほとんどを全員で過ごしたことで、自分たちが所属する学級のよさ、素晴らしさを改めて感じることで、仲間と活動することの楽しさや素晴らしさを再確認できたりするよい機会となったということが上記の記述からうかがえる。これは、一つ一つの種目をクリアーすることで、自分に自信をもてるようになり、その気持ちが一人から二人、そして学級全体に広がっていったからこそ、今回のパフォーマンス成功に結びついたのでと考える。

## 5 まとめ

### (1) 研究の成果

本研究は、子どもたちが目標を共有して、仲間と協力することを意識させるようなイベント、仲間と豊かにかかわりながら達成できるような活動を位置づけるなど、学級経営に体育的イベントを関連させることは、より肯定的な学級集団を育む重要な手立てとなるかどうかを確かめてきた。初めは教師主導でも、経験を重ねることで、いつの間にか、子どもたちが自ら方向性を見付け、目標に向かって頑張ろうとする態度が培われていった。また、全員で立てた目標を達成するためには、自分一人のがんばりだけでは達成できないこと、仲間の協力が不可欠だということを学んでいた。そして、その学びが全員に身に付くと、子どもたちの力で素晴らしい学級集団を形成することができるということを、今回の実践で確認することができた。

子どもたちは、いろいろな人やものとのかかわりの中で成長していく。学級全員で共に取り組む機会が多ければ多いほど、仲間同士の結束は強くなっていく。「一人の方が楽」と感じていた子も、長なわ大会後に「仲間がいるっていいことなんだ」と考えられるようになった。また、仲間のがんばりや応援に刺激を受け、「自分をもっと高めたい」と考える子どもが増えていった。体育的イベントを、仲間と共に成長する機会だと捉え、いろいろな思いや体験を共有しながら、記録の伸びを、自分たちの成長を捉えることができたからこそ、学級の集団意識の高まりにつなげることができたのである。

だからわれわれ指導者は、学校行事を有効活用し、子どもたちのかかわりがより深くなるように、意図的に活動を組んでいくことが大切であると考えている。

### (2) 今後の課題

今回の実践は、最終目標が卒業である6年生について行ったものである。数値的なものや行動面での変容であるが、Q-U調査や学校生活アンケートの比較をもとに研究を進めていくと、個人や集団の変容がより明らかになったのではないかと考える。様々なアンケートの活用必要性も感じた。今後の研究に活かしていきたい。また、他の学年でも、体育的行事・イベントを、どのように学級経営に結びつけることができるのかを、検討していく必要がある。また、体育的行事・イベントだけでなく、他の行事についての取り組みが、どのように学級経営に反映されるかについても実践し、検証していく必要があると考える。

## 引用・参考文献

- 杉田 洋 『よりよい人間関係を築く特別活動』 図書文化、2009
- 木下光正 『クラスの一体感が生まれる長なわとびの指導法』 学事出版、2007
- 山本 悟 『教育研究「長なわ種目とびの紹介と指導法の検討」』 社団法人初等教育研究会、4/2006、P78-81
- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』 東洋出版社、2008